

柳沢公民館 柳沢1-15-1 ☎042-464-8211 kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp
田無公民館 南町5-6-11 ☎042-461-1170 tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp
芝久保公民館 芝久保町5-4-48 ☎042-461-9825 shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp

谷戸公民館 谷戸町1-17-2 ☎042-421-3855 yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp
ひばりが丘公民館 ひばりが丘2-3-4 ☎042-424-3011 hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp
保谷駅前公民館 東町3-14-30 ☎042-421-1125 ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

西東京市での災害に備えて

西日本豪雨の支援活動から

小野 修平 (シヨージ防災研究所代表、防災アドバイザー)

大阪北部地震、西日本豪雨、台風、北海道地震…。今年、日本各地で多くの人が風水害や地震によって大きな被害を受け、今なお困難な状況の中で生活しています。愛媛県西予市で継続的に支援活動を行っている、西東京市公民館運営審議会委員で防災アドバイザーの小野修平さんに、活動を通して感じたこと、考えたことを報告していただきました。



復興までにはまだまだ長い道のり

平成30年7月西日本豪雨の発生から約3か月。報道では現地の様子ほとんど伝えられなくなり、復興までには長い道のりになりそうです。親戚や友人、災害ボランティアの力も借りながら、浸水被害や土砂の流入被害を受けた方々の多くは片付けの一区切りが付き始めましたが、住み慣れた自宅に住めなくなった方々は仮設住宅等に入居され、今後の住まいの確保を考えていかなければなりません。

愛媛県南予地域での支援活動

現在は、愛媛県西予市を中心に愛媛県南予地域で支援活動を行っています。これまで、西予市社会福祉協議会が設置した



野村保育所。幸いにして、園児が登園する前だったが、園児がいれば全員の避難はできなかつたかもしれない。



西予市災害ボランティアセンターの受付風景。これまでに全国各地から延べ7000人のボランティアが駆け付けた。

災害ボランティアセンターの運営支援をはじめ、災害時に必要不可欠な自治体と社会福祉協議会の連携のサポート、全世帯を対象として多職種が連携して行う生活再建に必要な支援についての聞き取り活動の仕組みづくり、外部からの支援者の受け入れ調整などを行ってきました。

今後は、さらに災害関連死や心身の不調、生活の困窮、自殺や孤立、要介護化、家族関係やコミュニティの変化など、さまざまな問題が複雑に絡み合いながら生じてきます。引き続き、被災された住民の生活再建に向けて、数年単位でかかわっていく予定です。

西東京市でも風水害が発生したら…

西東京市でも風水害が起きるリスクがあります。今年の8月

全市民の命を守るために

地震などの災害も含め、一刻を争う救助・消火活動や安否確認が必要な時、どのように対応したらよいでしょうか。西予市の事例を参考に考えてみたいと思います。

愛媛県西予市野村地区では、約650軒の浸水被害があり、2階まで浸水した住宅もありました。避難指示が出た段階で、消防団

が全世帯を回り、電気が付くまで戸を叩き、避難を呼びかけました。また、自力では避難が難しい方々を消防団のトラックで搬送するなどの対応も行いました。それでも、残念なことに逃げ遅れた5人の方が亡くなられました。

しかし、西東京市と愛媛県西予市は地域性も人口も全く異なります。現在、市では要配慮者の名簿と個別計画を順次策定しています。では、人口が20万人を超える西東京市で、みんなの命を守るために、私たちにできることは何でしょうか。

まずは、一人一人が「おとなさん」「お向かいさん」と顔見知りになることが一番だと思います。その輪が隣へ、隣へと広がっていき、西東京市全体へと広がっていきはしません。さまざまな仕組みづくりを進めていくことも必要ですが、その基礎として、身近な3〜4軒で互いの家族構成を知り合い、いざという時に声を掛け合える関係づくりができていれば、多くの命を救えるはず。今一度、玄関を出てすぐのご近所さんとの関係性について見つめ直してみたいかがでしょうか。

まとめ

過去の災害ではせっかく助かった命が過酷な避難生活の中で失われたり、体調が悪化したり、要介護状態になったりもしました。それを防ぐためには、よくいわれることですが、各自の備えを確実にしておくことと自治体による仕組みづくりが重要です。

この機会に、防災について考え、一つずつできることから防災対策を進めていきたいと思います。

小野 修平

大学在学中に防災アドバイザーとして活動を始める。講演会や研修会の講師を務めるほか、福祉施設や学校・保育園、自治会やマンション、企業などの防災コンサルティング事業を行った。

「剣岳一点の記」

新田次郎著／文藝春秋刊
青島一司 (北町在住)



剣岳 撮影：青島一司

山は古くから「神が宿る」と人々から崇められ信仰の対象となってきた。剣岳は「立山信仰」のもとでは死の山であり針の山であって、登ってはならない山であった。日本アルプスの山々が登り尽くされる最後まで未踏の山として残っていたのである。初めて登頂を果たしたのは、明治四〇(一九〇七)年七月十三日のことであり、「剣岳一

点の記」という作品は、命懸けでこの未踏の山の頂を目指した人々の物語である。初登頂を果たしたのは、陸軍参謀本部陸地測量部の柴崎芳太郎測量隊であった。日本地図完成のため入山を許されなかった未開の地「剣岳」への測量起点である三角点設置に挑む測量士たちの勇敢な姿を描きだしている。登頂に成功したものの彼らは山頂で意外なものを目にする。青錆びた鉄剣と銅の錫杖を発見するのである。後日、専門家の鑑定で奈良朝時代のものと判明した。測量士たちの決死の登頂は成功したものの遠い昔の奈良朝時代に踏破されていた。

錫杖は現在国の重要文化財として富山県「立山博物館」に展示されている。本と展示されている錫杖もご覧にならなればいかがでしょうか。



写真で見るといまむかし

柳沢橋

昭和58(一九八三)年、石神井川の改修工事にあわせて、柳沢橋の架け替え工事が行われました。



柳沢橋の開通式
昭和58(1983)年撮影
西東京市中央図書館地域・行政資料室所蔵



現在の柳沢橋
撮影：水口トミオ(保谷町在住)